

「臨床のための肝臓病理」

北里大学名誉教授 奥平 雅彦 著

東京慈恵会医科大学教授・第1内科

戸 田 剛太郎

本書は“臨床のため”の肝臓病理とあるように、肝疾患の治療に直接携わる臨床医と病理診断に携わる病理医との肝疾患に対する見解を結び付けるような形で、またそのような目的を持って書かれた書である。他の臓器の病態と同様、肝の病態についても最終診断は病理組織像によるところが大きい。われわれ臨床医の努力は問診、臨床検査、画像検査を駆使することにより、臨床診断をいかにして病理診断に近づけるかに向けられていたと言っても過言ではない。幸いなことに肝臓は肝組織標本が肝生検によって得られるという意味で、診断決定のうえで臨床医と病理学者との対話を構築することが可能である。しかし、異なった領域の研究者が共通の対象について対話をするためには共通の言語を持つことが必須のことであり、共通の言語を持つべく努力することが必要である。

本書の著者である奥平名誉教授はわが国の肝臓病学の分野で長年にわたって御活躍されており、肝臓病を専門とする臨床医が絶大の信頼を寄せ、また同時にわれわれ臨床医の信

頼、期待に応じてこられた病理医であり、本書のような著書を上梓されるには最適の方である。

本書は正常肝の形態学に始まり、循環障害、代謝障害、黄疸、ウイルス性、薬物性、自己免疫性肝炎、肝腫瘍、肝癌類似病変、肝硬変について、それぞれに適切な肉眼的な肝臓所見、肝組織像の明瞭なカラー写真(合計200枚近い)が添えられ、また各章ごとに肝臓病学に関連した病理学用語の解説が適切になされている。

最終章には肝生検標本の評価上の注意が述べられているのは、著者がいかに臨床医との対話を大切にしているかのあかしであろう。また、その中で著者は piecemeal necrosis と spill over の区別について触れ、限界板を periportal, pericentral, subcapsular に区別し、限界板は本来一層の細胞から成るのに対し、piecemeal necrosis は数層の深さで肝細胞の破壊が見られる場合であり、限界層の破壊と言うべきであるなどと記している。このように、ときとしてわれわれ臨床医が混同あるいは誤解しがちな組織所見について

も適切な解説が加えられている。

肝臓専門の臨床医の中には自分で病理組織標本を“読む”ことができる者もいるが、大部分の臨床医においては病理医によって示された病理組織所見の記述を頼りに肝の病態を考えるのが通常の対応である。このような意味では、用語の解説とその意味することが実際の組織像で示されている本書は、臨床医の座右の書として極めて有用である。

生化学、生理学、免疫学、分子生物学の進歩によって病因、機能面からの病態の把握については長足の進歩があったことは否定できない。しかし、分子生物学も形態学についてはまだ無力である。肝臓の形態学的異常がどのように肝の病態に関わっているかについては、実際には不明の点が多い。このような意味で、これからの分子生物学の展開のうえからも病気の形態学的側面の重要性はますます増していくであろう。

● B5 頁160 図28 写真42
原色図197 1995 定価6,077
円(税込) 円400